

Tom Fricke 2003 Culture and Causality: An Anthropological Comment. *Population and Development Review* 29(3): 470–479.

トム・フリック「文化と因果関係：人類学的コメント」

序 pp.470–472

- ・人類学者が因果関係の議論に貢献するとすればそれは文化への専門性を通じてなされる。
 - 幸いにも、人口統計学者は文化的意味の領域における人類学の洞察を期待している。
- ・人類学の外部の人々にとって、人類学内部の文化をめぐる議論の混乱はショックである。
 - ハンメル (Hammel 1990) の「人口統計学のための文化理論」は人類学の議論の現状を暴露し人口統計学に利用可能な文化概念を論じた。行動の動機づけの理論と行動が起こる有意味な文脈についての理論が人類学に不在とする悲観的な内容だった。
 - Kertzer (1997) は、数年後に、経済的な因果関係の理論と文化的な因果関係の理論の二項対立の緊張関係を指摘し、ギアツ (Geertz 1973) に代表される、文化への解釈学的アプローチの価値を否定するよう見える第三の道の可能性を指摘した。
- ・著者は、解釈学的アプローチが人口統計学的過程における因果関係の理解に人類学が貢献することができる代表的なものであることを示し、両者の批判に耐えうると主張する。
 - これは、因果関係自体の理解の仕方に由来する。
 - 多くの文献は、変数間の相関が疑似ではないという分析者の保証を強化することに関係しているが、「相関は単に共変動を測定するだけなので、[...] そのような分析は因果関係を確立するために直接使用できない」(Blalock 1972 : 442) という最も基本的な点にすべて同意している。
 - 言い換えれば、因果関係に関するすべての議論には、解釈上の決定が含まれる。これは労力を費やすには初歩的すぎるが、人口統計学の問題に適用できる方法で文化に関する特定のアイデアを使用するための窓が開く。
- ・著者の議論は、これらのプロセスが特定の設定でどのように機能するかを明らかにする。
 - 理解しようとするのが特定の場所と人々に関係している限り、解釈はその理解の必要な部分である。
 - 文化人類学が人口統計学的研究にもたらすことができる唯一の永続的な貢献は、解釈を暗示する、意味の観点からのものである。
 - 利用可能な最良の解釈モデルは、意味と動機のパターンの観点から表現され、他のすべてのモデルと同様に、人間の見方から独立していない。
 - この主体の見方は、私たちの議論の規則と特定の因果的説明の有効性を擁護することに示唆を与える可能性がある。

人類学的貢献 pp.472–473

・文化の理論が欠如しているため、人口統計学への人類学の貢献はより大きなプロジェクトの補助としての高価な地域と言語の専門家の採用に還元される可能性があることを、人類学的人口統計学の歴史は示唆している。

- 地域の専門分野を除いて、人類学が人口統計分析へ洞察を提供するのは、主に文化的な問題の導入を通じてである。既存の研究には、3種類の人類学的貢献がある。
 - (1) 小規模で到達困難な集団間の標準的な人口統計データの収集と分析。
 - (2) 既存の調査データの再解釈、地域に関連する新しい変数の社会調査への追加。
 - (3) データ収集と分析の戦略への文化的理解と文脈の適用。
- (1) は有意性が低下しているが、(2) と (3) は重要性が増している。そのため、人口統計学に役立つ文化の定義が必要である。

・著者自身の研究 (Fricke 1997a, 1997b) では、人口統計学にとって最も有用な文化理論は、行為の世界を定義し、その世界での行為の動機を提供するものとしてそれをとるモデルから始まると主張してきた。

- これらは、ハンメルが人口統計学者自身にとって最大の関心事であると正確に診断した領域であるだけでなく、ギアツから認知人類学者による最近の研究にいたる、何人かの人類学者による文化の定義に埋め込まれた要素でもある。
- 文化的意味の不安定で変化する性質に関して、Hammel (1990)、Kertzer (1997)、Greenhalgh (1995b) が指摘した点も、多変数モデルにおける「文化」のより深刻な誤用のいくつかに対する彼らの批判も、この種の文化への志向と本質的に両立しない。
- それにもかかわらず、共有された理解と、これらの理解が社会的言説を維持するために保持する集団の境界には、最小限のレベルの安定性がなければならないことを強調することも重要である。
- その安定性の程度は、これらの理解が特定の因果的議論でどのように使用されるかを決定する可能性があるが、これらは個別的な議論を必要とする。

・文化の解釈理論に関連する多くの実践者は、文化の理解を多変量因果分析に適用することに不快感を覚えるだろう。

- その不快感のいくつかは、経験的社会科学の手続き上の仮定、すなわち、日常の私たち自身の経験の多くと著しく対立する、人間の見方を暗示する仮定に由来する。
- このことは、これらのモデルの使用が、私たちが特定の手続き規則の必要性をどれほど強く主張するかに影響を与えうること示唆している。
- これらの手続き規則のほとんどは、世界の因果関係をそれに関する私たちの考えから分離する経験的分断を横断して解釈的保証を提供するために開発され、祀られている。

・文化のジレンマは、外部の力や行為者がオブジェクトを動かす因果関係とは異なり、文化は人間の内部になければならない理解と動機付けの文脈であるということだ。

- 文化を外部の力と見なすと、文化の流動性と変化への開放性を説明できない。
- 継続性と共通の理解の観点から操作する必要がある人間に内在化されていると見なさない場合、文化が時間を超えて継続する能力についての洞察を失うリスクがある。
- ある意味で、文化は習慣と同じように私たちに浸透する。

・このように文化を考えると、「約 40 年前の構造機能概念から抜け出せなくなり、急速に硬化し、化石化のあらゆる兆候を示す」(Hammel 1990 : 456)、法や規範のセットという古い決定的な方法で文化を使用するアプローチから私たちを解放する。

- それは、意味のフレームワークが実際の行為者の具体的な状況や歴史において人間の行動の論理をどのように提供するかについて複雑な方法で考えるようになる。
- ライフコース理論とその変数、政治経済理論とその変数、そして文化の解釈的理解のための余地が同時にある。
- 同時に、私たちがどのように仮説を立て、説明を擁護するかについても示唆がある。
- 以下では、人口統計学の 2 つの関心領域(集約分析と個人レベル分析)の例を挙げる。どちらも、この文化の概念を意味と動機のフレームとして利用している。

集合の説明 p.474

・集団間の人口統計学的現象に見られる集合体レベルの違いについて、文化を呼び出すのは簡単である。

- 集団は通常、地理、民族、宗教あるいはこれらの組み合わせで定義される。
- これらの変数の古い因果の使用は、「これらの X の種類の人々は、子供が多い or 結婚が早い。彼らの文化には、そのように振る舞うように指示する規範や規則があるから。」と要約できる。

・これらの変数を使用するより微妙な方法は、社会的慣習、例えば交叉イトコ婚は、母集団 Y よりも母集団 X で一般的であることに注意することだ。

- Dyson and Moore (1983) : 婚姻システムに関連した女性の地位に焦点を当て、北インドと南インドの比較し、後者が前者よりも結婚年齢が高く出生率が低いことの直接的原因 (proximate cause) とした。

・意味と動機付けの枠組みに関する文化的説明はさらに一歩進んで、交叉イトコ婚システムのある地域では、相互同盟の倫理が行動を解釈し動機付けるための統治の枠組みとして機能する、と主張するかもしれない。

- 交叉イトコ婚は、同盟における結婚の象徴的な役割、結婚後の出生家族に対する女性の継続的なアイデンティティ、そして結婚交換によって団結した家族や血統全体が祖先を共有していると見なす程度と、重要な関係がある。
 - 実際にはこれよりもはるかに複雑になる。著者は南インドで調査をしていないが、著者の一般化は、いとこ同士の結婚を好む別の集団での著者自身のフィールドワークと、他の設定に関する民族誌の知識から来ている。
 - 北インドの母集団は、これらの同じ次元で南インドと非常に大雑把に対比される。
- ・ここでのポイントは、詳細に説明することではなく、意味の一般的な強調を示すこと。
- この一般的な方法で使用される宗教の潜在的な問題についてのポイントは、宗教は他の点で非常に異なる文化システムを持つ地域を横断することが多いということ。
 - そしてこれは、文化的文脈の境界を特定することに関する重大な問題を示唆している。これは経験的な問題であるが、それでも非常に現実的である。文化の属性が共有されていると言い得る母集団をどのように境界づけるのか？
 - 一方では、制限された集団に当てはまる何かを言うことができるようにしたいと思う。その一方で、私たちは常に生態学的誤謬を犯す危険にさらされている。
 - これは、どの集計分析でも問題だが、これを言っても問題は解決しない。人類学の分野では、これらの種類の議論は人々を「本質化」という深刻なリスクを伴う。
 - もっともらしく擁護できる意味の枠組みとなる要素を選択することへの懸念がある。

個人の説明 pp.475–476

・この視点を個人のレベルに引き下げるとは、非常に具体的な尺度が文化的な用語で解釈できることを指摘するのに役立つ。

- 人口統計分析では、世界中で「近代化」の指標として結婚年齢と教育が重要な変数であることが指摘されてきた。例：学校教育は晩婚化に関連する。
- それにもかかわらず、この関係についての著者の理解は深く解釈的である。「教育は晩婚化を引き起こす」とはめったに言わない。
- 古い人口転換理論は、教育を近代化の指標と見なし、世俗化、合理性の向上、および個人の自律性の向上と関連していると主張した。この理論の後継者でさえ、設定を超えた教育の共通の意味に疑問を呈することはめったにない。
- 例えば、彼らが、子供を教育したいという親の願望が彼らを結婚市場からより長く遠ざけると主張するとき、他の変数への影響についての解釈は異なるかもしれない。
- 結婚年齢と学歴の間の正の関係の説明には、異なるアプローチの2つの形式がある。
 - ①個々の子供に与える自律性（近代化理論）に焦点を当てる
 - ②子供の結婚時期を親がコントロールできるようにするが、学校教育と結婚の両立不能性との機械的な関係を示唆する。

・しかし、これらの説明はどちらも、文脈における教育の特定の意味に関係しておらず、これは設定によって異なる可能性がある。

- パンジャープの田舎の村からの調査データの分析で、著者と同僚 (Fricke, Syed, and Smith 1986) は、他の多くの個人の特性の管理が考慮されている場合でも、女性の教育は結婚年齢と通常の正の関係があることに気づいた。
- 分析者は、これらの結果を近代化の枠組みの観点から解釈したくなるかもしれない。例：教育は自律性を高め、運命をより細かく制御し、結婚年齢を高める。
- しかし、結果はまた、1年を修了せずに短時間だけ学校に通った女性の多くの割合が、まったく学校に通ったことがない女性よりも遅い年齢で結婚することを示している。

・人口転換理論の説明も非互換性の説明もこれらの関係に役立たない。著者たちは、ローカルな文脈の非常に具体的な特徴を参照せずに関係を理解することはできないと主張。

- 教育が地位の象徴的な指標のより大きな世界の一部になり、この地位が、年齢の増加の結果としての結婚における女性の価値の喪失と釣り合ったので、どんな学校教育も女性の出生家族に地位を与え、娘を嫁がせるのをより長く待つことを可能にした。

・ここでは、教育と雇用の関係はほとんど関係がないことに気づいた。

- このような状況にある女性は、金銭的な仕事において家族を真剣に支援する可能性は低く、確かに教育を必要とする金銭的な仕事においてはそうではない。
- また、この設定でのすべての結婚が手配されたことにも注意した。文脈を無視した標準的な説明の失敗は、著者たちにパンジャープ人の結婚に関する民族誌的文献に目を向けさせた。女性の象徴的な重要性、人と集団の関係、結婚の社会組織、名声システム、人格と性別の文化理論に関する資料を含む、家族と親族によって組織されたより広い関係の文脈の中で結婚を論じた文献に焦点を当てた。
- 教育を質の指標として解釈し、結婚によって組織された家族間のつながりの望ましさに影響を与え、結婚交渉に関与する幅広い名声の指標の中に学校教育の経験を位置づけた。実際の教育内容と、女性が自分の配偶者を選ばない状況での自律性への影響は、私たちの考えの二次的なものだった。

・著者たちの学校教育の調査は、教育についての話から、女性の家族について発言する文化的に意味のあるシンボルに測定を変換した。そうすることで、経験的關係の可能な解釈を劇的に変えた。

- 研究者がもっともらしさを懸念しているのと同じように、私たちの解釈は、文化的内容のない一般に容認されたモデルを打ち負かした。これは、これらの他のモデルの異常をより首尾一貫して説明したためである。

- さらに、分析内の他のすべての変数について一貫した文化に基づくストーリーを確立するフレームワークを使用して、これを行った。

主体の本性 pp.476–477

- ・人間主体に中立的アプローチする方法はなく、それぞれが根底にある方向性を暗示する。
 - 逆に、ある方向性に賛成したり、一部の特性が他の特性よりも本質的に人間的であると主張することは、一部のアプローチが他よりもこれらの特性によく適合していると主張することである。
 - 着実な方法に到達するために「哲学的」問題を省くことができることを示唆する研究デザインの議論 (KKV) は、あらゆるケースで分析手順を標準化することが理解をどのように不十分するのかを問うことを要求する。
 - マードックは、分析戦略で普及している人間主体のイメージに対する彼女の異議は、経験的、哲学的、そして道徳的であると主張した (1970 : 8-9)。
- ・文化と意味についての多くの議論は、具体化されていない抽象的な性質を持っており、人間主体を理解することが議論の理由であることを忘れがちな程度に原理と抽象化を好む。
 - 解釈指向の利点の 1 つは、それを見失わないようにする。チャールズ・テイラーは、人間の主体の本質的な性格が意味の観点からの自己解釈と行動の能力だと主張する。彼にとって、「欲望と動機を持ち、目標と願望を持つ行為者の行動として見られる人間の行動は、必然的に意味の観点からの説明の獲得を提供する」(Taylor 1985 : 27)。
- ・ハンメルが示唆するように、私たちが、何が彼らを動機づけているのか、彼らが世界をどのように見ているのかを実際に知るために人々の頭の中に入ることはできない。
 - 言い換えれば、私たちが理論の観点から活動しているのは事実である。しかし、これは私たちが日常生活を送るのと同じ文脈である。
 - 日常の人との関わりの中で「なぜその人がそのようなことをしたのか」と自問するならば、その人の世界観や動機、具体的な状況を理解するための答えを求める。
 - 著者は、本当の理由にできるだけ近づきたいのであれば、著者の解釈が間違っている可能性があり、より多くの情報、または利用可能な情報に照らしてより一貫性を保つために、当初の解釈を変更する可能性があることを認める。
 - 著者が説明しようとしていることが重要である場合、またはその人が著者にとって特に重要である場合、私はその人の過去の歴史と親族や結社のより広いネットワークについての情報を含めることを試みるかもしれない。
- ・人類学的フィールドワークは、日常のこの平凡な作業を繰り返す。
 - 私たちの理解の試みは、私たちが文化的他者の頭の中に入ろうとする想像上の行為だ。

- より具体的には、意味や動機付けのシステムについて一般化を試みたり、特定の設定での行動や出来事の原因を説明するために知るべきことを考えようとするとき、私たちは実際の人々を念頭に置く。
- 人口統計学者が民族誌的研究形態への移行した例：「各村やその家族と親密になる」Caldwell (1982 : 3-5) という経験は、フィールドデータから結論を導き出すアプローチにおけるその後の彼の柔軟性を裏付ける。

含意 pp.477-478

これらのコメントは因果関係の問題から遠く離れているように見えるかもしれない。技術的で制限された感覚を保持したい人にとっては、これが当てはまるかもしれない。

- しかし「経験的に、2つの変数間の接続が必要であることを証明することはできない」(cf. ヒューム) ので、因果関係の議論は必然的に「理論的言語」に導くが、この場合は、変数の解釈が望んでいたほど単純ではない可能性を示唆するメタ理論的言語だ。
- 意味や動機付けの独立した尺度がないというハンメルのポイントは、人の頭の中で起こることは最終的に私的なものであるという認識である。これは還元不可能に思える。

・しかし、因果関係自体が観察できない場合、因果関係を調査するために使用する手順は、特定の種類の問題に対して非常にうまく機能しているため、それ自体が開発され維持されている規則である。

- これを主張することは、それらに価値がないと主張することではなく、代替手順の可能性を開くことである。
- 自然科学でうまく機能する手順(被験者が内省的、意識的、道徳的存在ではない場合)は、人間の因果関係の研究にはあまりにも限定的であるかもしれない。

・Becker (1998) が主張するように、因果関係が観察できないということは、因果関係を主張するための私たちの慣習が別の「社会学の技法(取引のトリック *tricks of the trade*)」であることを意味する。

- 文化の記述は必然的に、個人差に適切な因果的説明とは異なる妥当性の基準を必要とする意味体系の記述である。適切な記述の主要な基準はその一貫性である。

・人口統計学者にとって受け入れるのが最も難しいのが、この文化と因果関係へのアプローチの特徴かもしれない。

- それには、定量分析の通常の分析的検証に典型的なものとは異なる形式の議論と、再定式化に対するより大きな開放性が必要である。
- その利益は、地域の基準、そして最終的にはそれ自体が研究の対象である人々に基づいた意味のより微妙で文脈に応じた議論の中で得られる。